

所信表明

二〇二三年度中央常任副委員長選挙所信表明

常任副委員長候補

法学部 三回生

鈴木 棟登

この度、立命館大学学友会中央常任副委員長選挙に立候補いたしました、法学部法学科司法特修の鈴木棟登と申します。正課では司法特修と教職課程を履修し、少年法や犯罪学、刑事訴訟法等を研究しております。学友会関連では、一回生より新聞社の記者として活動し、二回生より中央事務局調査企画部員、新歓実行委員会会計、会計監査委員会副委員長を務めてまいりました。以下では、私のこれまでの学友会活動の振り返りと所感を述べたいので、2023年度中央常任副委員長選挙立候補に伴う所信表明をいたします。

【振り返りと所感】

① 新聞社を通じて

新聞社は、学友会中央パートに所属し、学友会の意思決定に参画する一方、一步離れたところから公正公平な立場の「団体」として学友会を俯瞰する立場でもありません。ここでは、学友会や大学による施策を批評し、世論形成の一助となつてまいりました。もつとも、この立場としての視点は、単に施策を批評するに留まるものではなく、第三者として代替案を検討し、広く発信するものであります。学友会には、このような立場をもつ組織や役職は他に存在しないため、稀有な役割として活動してまいりました。

そこで、新聞社の記者として学友会を見たところ、未だ学友会の行っている施策や活動について、積極的な情報提供がなされていないということが見受けられました。中央パートに所属している各組織が何を行っているのか、どのような経過を辿つてこの政策が決定されたのか、未だ情報の提供量が不足していると考えられます。結果として、学友会所属団体に直接関与していない学友会員は、

学友会という組織そのものの存在を認知せず、関与している学友会員であっても、認知度はあまり高くありませんでした。

② 中央事務局調査企画部を通じて

中央事務局調査企画部は、学友会に所属する団体への支援や、各種の広報等をしております。ここでは、学友会所属団体との関係性を構築し、団体との関わり方、団体が抱えている問題点を、さらには学友会の広報塔としての役割について検討してまいりました。特に広報の面では、先述の新聞社としての役割と併せ、いかに情報の提供や活用をするのかを重点的に検討し、サークルコレクションの作成への加担やホームページの更新、メールでの情報提供を行いました。

また、調査企画部は先の新聞社と共に、私自身の写真撮影の能力を發揮する場でもありました。学友会における各種広報物に使用される写真の多くは私が撮影いたしました。この点、吉田次期中央常任委員長が掲げる「学友会活動を通じたキャリア形成」に向けた土台となる物だと考えられます。一方、調査企画部は2022年度より更

なる発展を遂げ、新たな本年度に築き上げてきたものを、次年度以降にも繋げていくという文化基盤を生み出さなければなりません。凌次期中央事務局長をはじめとした方々のいう「引継ぎ文化の形成」は喫緊の問題であると感じました。

③ 新歓実行委員会を通じて

新歓実行委員会では、新入生を中心に、一部の上回生や団体を支援してまいりました。特に私は会計として、厳格な管理体制のもと、出金業務に従事したほか、新歓運動全般の把握を行うことで、より充実した新歓運動が達成されるよう尽力いたしました。また、自治会をはじめとする中央各パートをまとめる立ち位置で活動することにより、新歓活動における各パートの問題点や要望を把握いたしました。

新歓運動とその会計面においては、次の三点が問題であると考えました。

第一に、学友会費出金の妥当性についてです。新歓運動には年度予算のうち、決して少なくはない額の予算を編成しなければなりません。この点、学友会費の出金に

は、学友会員への還元性が十分に認められることが必須となります。しかしながら、新歓運動中の役員ヒアリングの中では、還元性に疑問が生じる企画や出金希望品などが見受けられ、差戻しをせざるを得ないことがあります。後述する引継ぎにおいても述べますが、各団体やパートにおいては、世代を通じて、今一度学友会費の出金につき妥当性を再考しなければならないと考えました。

次に、引継ぎ文化が不十分であることです。新歓運動は年度当初に行われるため、代替わりの時期に多少は重なることとなります。そこで十分な引継ぎがなされれば問題はありませんが、多くの団体において本年度は残念ながら十分とは言えませんでした。結果として、学友会員への還元性が不十分であるとされ差戻された事例や、事後に出金処理をする際、前任からの指導がなされていないばかりに処理方法がわからず、会計より指導をしなければならぬ事例が多発いたしました。本来であればこのようなことがあつてはならないため、次期常任委員会役員の掲げる引継ぎ文化の形成を能動的に提唱及び主導していきたいと考えております。

最後に、学友会における人手不足です。新歓運動の結

果、各団体は多くの新入部員を獲得し、また新入生自身にも多くの還元がなされました。一方、中央パートにおいては依然として人手不足が否めません。よって、吉田次期中央常任委員長の掲げる「人的資源の受け入れ」にあるよう、人的資源の確保は急務であると考えております。

▶ 会計監査委員会を通じて

会計監査委員会では、本年度も例年同様、学友会会計規程にもとづく監査を実施いたしました。学友会費の出金は「学友会費三原則」に照らし、妥当なものであると認められたもののみ許可がされます。そこで、出金相当と認められるかを本会で判断しなければなりません。

しかし、過年度の会計監査では、監査自体は年度内に終えられたものの、大幅な遅延となってしまいました。これでは、学友会費出金の妥当性判断はもとより、大学による代理徴収制度の根幹が揺らぐことに繋がりがかねません。そこで、本年度は迅速かつ正確な会計監査がなされるよう、監査委員長の職務を補佐することに尽力いたしました。

とはいえ、この迅速かつ正確な会計監査が本年度で終了しては、学友会費の徴収や出金が再び不安定なものとなってしまう。よって、次年度以降も本年度と同様、延いては本年度以上の監査体制を構築すべきだと考えております。また、監査をする側人員のみならず、監査をされる側に対しても、学友会費の出金相当性については再考する機会が必要でしょう。

【次年度以降への所信表明】

以上のこれまでの振り返りと所感をもとに、私は次のことを所信表明として提示いたします。

一 客観的な視点や広い経験からの提言と正当性の確保

これまで新聞社において第三者としての視点を引き続きもち、中央常任委員会役員として、また中央常任副委員長らの職務である、中央常任委員長を補佐するという役割から、他にはない視点からの提言をしてまいります。長きにわたり中央での職務にあたる他の役員とは違い、離れたところで活動していた私だからこそその意見がある

と考えております。過年度や慣習に囚われることなく、一旦引いた立ち位置で政策を見直すことを追究してまいります。

また、中央から離れたところにて活動していた新聞社としての経験に併せて、その他務めておりました三つの役からの視点や能力を集合させ、各所と連携してこれらの経験を生かしていきたいと考えております。

② 積極的な情報提供による透明性の発信

これまで各部署を経験した立場と、本学の学生としての立場との両方から検討して、学友会の情報提供は必要不可欠です。万一、今後学友会員の認知しないところで中央が勝手に活動している、学友会活動の還元性に問題が生じかねません。そこで情報については、常任副委員長としてどの部署を通じた提供をすべきか判断したいと考えております。

③ 引継ぎ文化の形成

これまでの学友会で引継ぎ文化が不十分であったことで、先に述べた新歓期における差戻し事例をはじめとし

た不都合が現に生じております。つきましては、課外三本部との連携のうえ、吉田次期中央常任委員長や凌中央事務局長の政策に加えて、引継ぎ文化の形成を目指してまいります。この結果、各部活動やサークル等を含めた学友会活動は安定化し、他の職務に影響が及ばなくなると思えられます。

この点、特に中央パートに関しては、前任からの引継ぎがなされ、活動が安定化することで、桑原次期学園振興委員長が方向性として提示する「学生自治を主体的に担う我々の活動の高度化」に繋がると考えております。

【結びに】

ここまで本所信表明をご一読いただき、ありがとうございます。ございました。中央常任副委員長という役職は、中央常任委員長を補佐するという原則がある一方、比較的自由度の高い役職であるといえます。そこで、私が中央常任委員会に過年度や慣習に囚われない視点をもって参画すること、より学友会の安定化に寄与できると考えております。皆様に私が中央常任副委員長に相応しいとの御信

任をいただければ、必ずや役目を果たしてまいりたいと思えます。以上、よろしくお願いいたします。

投開票日二〇二二年一月一九日

二〇二二年度立命館大学学友会選挙管理委員会

同中央常任委

所信表明

二〇二二年度中央常任副委員長選挙所信表明

常任副委員長候補

生命科学部 三回生

田中 颯

この度、2023年度常任副委員長に立候補させていただきます。いただきました、生命科学部3回生の田中颯と申します。本所信表明では、立候補までの経緯と来年度の活動の方向性について述べさせていただきます。

【立候補までの経緯】

まず、簡単に私のこれまでの活動について触れたいと思います。私は1回生の秋学期に生命科学部自治会に所属しました。そこからおよそ2年間、生命科学部自治会の一員として、また時には委員長や会計として活動して参りました。会計として、

年間予算や月次決算、年間決算の作成を行いました。また、会計の活動ではありませんが、会計監査委員として2021年度、2022年度の会計監査にも携わりました。委員長としては、春・秋意見交換会、五者懇談会、履修相談会、研究室懇親会といった活動を行いました。意見交換会では、毎学期ごとに授業アンケートを行い、授業ごとの細かい指摘から施設に関する広い視野での要望などを学部側と協議いたしました。実際に、授業単位で改善された例がいくつかありました。意見交換会で扱いきれなかった課題や授業以外の課題などは五者懇談会で学部側と協議いたしました。その中でも研究室についての課題が挙がりました。研究室の狭さ故に危険な試薬が通路においてあったり、机が少なく勉強しにくかったりといった問題がありました。これは実際に4回生の方や教授らに話を聞きに行き、そのお話しを元にアンケートを作成・実施いたしました。結局、研究室については学部単位では扱いきれず、現在全学自治会執行委員としてキャンパス別の懇談会にて協

議できるように準備しております。研究室懇親会では学部生向けに教授と直接お話しができる機会を提供いたしました。2021年度研究室懇親会はオンライン開催ということもあり、学部に所属する全教授を招待しました。大がかりな企画のため、半年かけて準備・開催いたしました。その他、人員確保に向けての活動も行ってきました。具体的には、学部事務室、学生オフィスにご協力いただき、新入生オリエンテーションにて、新入生約400人の前で生命科学部自治会の紹介と、履修相談会という新入生向け企画の情宣をさせていただきました。その結果、特に前者では各クラスから1、2名以上の自治委員を確保し、自治会活動の基盤を作りました。以上が、簡単ではございますが、私のこれまでの活動であります。

これまでの2年間、学部側との懇談会や企画運営などで達成感を得ました。特に、意見交換会で要望したことが実際に改善されたことを耳にしたときには大きな達成感を得ました。また、仲間とともに大きな企画をやり終え、企画後アンケート

トにて感謝の旨が届いたときにも大きなやりがいも感じました。しかしながら、その逆も然り、たくさんの大変な経験もして参りました。コロナ禍ということもあり、先代からの十分な引き継ぎがなく、過去資料とにらめっこしながら活動を行う日々、また、情報共有不足によるオリター団とのすれ違い、人員不足による事務的業務の偏り、ワンオペ状態での運営による仲間との意見のすれ違いなどを経験して参りました。以上のようなこともあり、最近では、よりストレス無く、楽しい活動だったらいいのと考えておりました。

そんなときに、吉田次期常任委員長に「常任副委員長をやってみないか」とお誘いをいただきました。その際、吉田氏の所信表明にもあった、「組み上げる」時代にしたいとの旨をお聞きました。何にせよ、基礎が無い状態で続けていくことはとても困難で大変なことだと思います。逆に言えば、基礎や土台がしっかりしていると、通常の活動に加え新たな試みにも挑戦できると思います。自治会活動に置き換えて考えると、〇から始まる

活動と、「引き継ぎ」がすっかりされた後の活動、

その活動の違いは明らかであります。つまり、ごく当たり前のことを言うように恐縮ですが、「引き継ぎ」は大事だということです。では、実際に引き継ぎとは何でしょうか。実のところ私も、ちやんとした引き継ぎの正体がわかっていませんでした。ただ、最近なんとなくこれが正解なのではないかと思ったことがありました。先日行われた常任委員長選挙にて、吉田氏が、「「引き継いでいくこと」とは実際になんなのか」といった質問に対して、引き継ぐべきは心持ちの引き継ぎだと、そのときに何を考えて何をしたのかを残すべきだとおっしゃっていました。私はそれに納得すると同時に、引き継ぎの重要性を再確認するだけでなく、そのほか私と同じようなことで困っている方たちの手助けとそれぞれの土台の構築をしたいと考えました。そのため、自身で役割を見い出せる、ある意味自由な活動が行える常任副委員長として中央パートの土台作りとサポートを行いたいと考えました。以上が、私が 2023 年度常任

副委員長に立候補した経緯でございます。

【来年度の活動の方向性】

ここでは、私が当選した際の2023年度の活動方針について述べさせていただきます。私は、中央パートの土台作りとサポートを行いたいと考えております。そこで、常任副委員長として常任委員会と中央パートをつなぐ架け橋や相談役になりたいと思います。架け橋としては、私が常任委員会と中央パートの間に入ることで、普段常任委員会と関わりが無い方でもコンタクトが取りやすくなり、活動中の疑問や問題などを迅速に共有、解消できることを期待しています。これは、立候補までの経緯にも記述した「ストレスのない活動」にもつながります。また、相談役としては自身の経験を元に細かいところまで親身に対応したいと考えております。上記に記載した通り、自身の常任副委員長としての在り方を踏まえた上で、以下にその方針を記したいと思います。

① 常任委員会と中央パートとの結節点としての活動

生命科学部自治会として活動していた頃は、会計について誰に聞けばいいのかわからず、ほとんど面識のない方にLINEで質問したり、趣意書や企画書など他の学部自治会の資料を参考にして作成したりしていました。やはり、他キャンパスに所属しているという理由で、初対面であったり、名前しか知らないといった方に質問や相談をしたりするのは少しばかり気が引けるものなのではないでしょうか。

そこで、中央パートの方の質問や相談、問い合わせに関しては、常任委員会と中央パートの結節点として私が在り、必要に応じて常任委員長や中央事務局長、学園振興委員長、さらには事務局内の各部長などとコンタクトをとれるように調整したいと考えております。また、私自身の経験から助言できるような相談であれば親身に対応していく所存です。

② 各学部自治会の活動と共有

全学部生への還元という視点から、各学部自治会の活動は足並みをそろえて行うべきだと考えております。それは決して、学部独自の企画を取りやめさせるのではなく、あくまで各学部の特色は残しつつ、要求実現運動のメインとなる五者懇談会や次世代につなげるための人員確保に向けた活動については全学部が行うべきであると思っております。以上を実現させるため、全学自治会、さらには学園振興委員会と一体となって、定期的に各学部自治会から若干名、活動や課題についての共有会を行い、横のつながりを広げ自治会活動を活性化させたく思います。

また、執行委員は存在するものの、実際にはあまり機能していない自治会については、こちらから能動的にアプローチしたいと考えております。各学部自治会がどのような活動を行っているのかを伝えた上で、活動が復活するように手助けします。主に新歓期での人員確保や五者懇談会開催を常任副委員長としてお手伝いできたらよいと

考えております。

以上、〇点の方向性に沿って活動する所存です。

【最後に】

繰り返しになりますが、私は吉田氏の考えと同じく「組み上げる」時代にしたいと考えております。そのために、中央委員会と中央パートの距離がさらに近くなり、小さな問題には迅速に対応・消化でき、大きな課題は共有・協議できるような環境になればと思います。ここまでご覧いただき、ありがとうございます。

投開票日二〇二二年一二月一九日

二〇二二年度立命館大学学友会選挙管理委員会

同中央常任委員会

